「一学一山運動」への参加

丸山　徳次

2006年9月、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが「一学一山運動」を立ち上げました。私たちの里山ORCもこれに参加することになりました。10月14日に、この第一回フォーラムが開催され、私（丸山）が里山ORCおよび「龍谷の森」里山保全の会について報告しましたので、このフォーラムのこととあわせてお伝えしておきたいと思います。

（1）「一学一山運動」とは何か

早稲田大学平山郁夫ボランティアセンターの所長であり、早稲田大学総長である白井克彦氏による「『一学一山運動』についてのご案内」によれば、この運動の目的は、おおよそ次のようです。

「荒廃する日本の自然を若者の力で再生し、未来につなげていく運動を展開しようという取り組み」であり、すでに地元地域において、何らかの環境保全活動に取り組んでいる大学を「ネットワークでつなぎ、より多くの学生や教職員、地元市民、NPO、企業等が連携しあって自分たちの地域と密接に関わる山林や河川、湖沼、海浜、自然公園等における環境保全活動を広く展開することを目的としています。より多くの大学にこの運動に参加していただき、日本全国の自然を護り、保全する活動を展開し、あわせてその組織のノウハウを共有し、ゆくゆくは、地元の高校や中学、小学校へとその活動の輪を広げていくことを想定しています。」

注目すべきは、早稲田大学の平山郁夫ボランティアセンターがこの「一学一山運動」の提唱者であり、推進者ですが、早稲田大学はあくまでもサポート役に徹する、ということです。先の「ご案内」には、次のように述べられています。

「今回の呼びかけは、早稲田大学が実施する活動に参加してくださいというものではなく、各大学が共通の目標に向かってそれぞれのやり方で活動を展開することを呼びかけるものです。したがって、実施方法も内容も期間も各大学に委ねられています。」

「一学一山運動」の実行委員長は、早稲田大学の前総長であり、現学事顧問である奥島孝康氏ですが、奥島氏の名前で提示されている「『一学一山運動』趣意書」は、次のように述べています。

「わが国の自然環境を護るために、全国の大学が連携した日本全土にまたがる環境保護運動を提唱します。

ひとつの大学が、ひとつの自然環境を守り続け、後世に受け継いでいく運動。それが『一学一山運動』です。

近年になって、全国各地の大学において身近な自然を護るための運動が活発に行われはじめました。ひとつひとつの活動は小さなものかもしれません。しかし、こうした全国の大学同士が『一学一山運動』の名の下で手を取り合うことによって、日本が誇るべき豊かな自然を後世に残す取り組みがさらに大きな運動体となりうるのです。」

(2)「一学一山運動」第一回フォーラム

2006年10月14日（土）午後1時30分から、「一学一山運動」第一回フォーラムが早稲田大学で開催されました。次のようなプログラムでした。

基調講演：「『一学一山運動』とは」　奥島孝康

事例報告：

龍谷大学「里山保全ネットワーク」　丸山徳次

天理大学「建学の精神実践プログラム（奈良県）」　池田士郎

國學院大學「鎮守の森CO_2吸収効果測量活動（東京都）」　大崎正治

ルーテル学院大学「環境NPOマーブレス（秋田県）」　佐藤英一

法政大学「キャンパス・エコロジー・フォーラム（東京都・茨城県・千葉県）」
桜井春佳・木之内潤（学生）

広島経済大学「武田山まちづくりプロジェクト（広島県）」
片山宏樹・加地泰盛（学生）

早稲田大学「高梁市環境保全型森林ボランティア（岡山県）」　仲村正彦

「他大学の事例」　山口博之（事務長）

意見交換会：「一学一山運動」への期待と課題

ファシリテイター　岩下広和（NPO法人森づくりフォーラム）

最初に奥島孝康氏の基調講演を聴き、正直いささか驚きました。奥島氏は、若い頃から「山」が好きだと言われ、みずからの登山の諸経験を語り、スイスのアルプスや富士山の話をされたからです。つまり、「一学一山運動」の提唱者である奥島孝康氏の言われる「山」は、里山のヤマではなくて、富士山のサンであり、山岳だったのです。すると「一学一山」の「山」も、やはりヤマではなくて、あくまでもサンなのだろうかと考え、私は少々混乱してしまいました。

改めて先の「趣意書」を見てみると、次のように言われています。

「活動対象は、山でも森林でも、河川でも湖沼でもかまいません。地域の実情やニーズにあわせた活動をすることで、『大学と学生による教育的社会貢献活動』と同時に『将来を担う子どもたちの自然体験活動』を叶え、地域独自の社会貢献活動ならびに教育活動を、大学を発信源にして社会に広めることを目指します。」

そうだとすると、「山でも森林でも、河川でも湖沼でも」かまわないから、とにかく大学が各地域の拠点となって一定のエリアの環境保全を推進しよう、という考えのようです。「趣意書」には、さらに次のように述べられています。

「高度経済成長の時代から現在まで、大学という存在は、最高学府の場であると同時に、『地域のシンボル』でもありました。多くの若い才能が集うことで、地域社会の発展に貢献していく。そんな力を持つ存在でした。そしてこれからの時代、大学は、地域や社会の環境に貢献していくべき存在にもなるべきです。

大学は、街をつくるだけではなく、地域の環境を守る存在にもなれる。」

大変高い理想を掲げていることに、私は敬意の念をもちますし、「一学一山運動」というネーミングのうまさにも感心しました。ただ、いささか漠然とした印象をもったことも、確かでした。環境保全の活動には、明確な対象とそれに即した方法論が必要だろうと思います。私たちの里山ORCが考えている「里山」保全の方法論は、近年次第に言われるようになった「里海」とか「里川」とかいった領域にまで適用可能だろうとは考え

ますが、「山岳」となれば、また別のことを考える必要性が出てくるでしょう。

混乱した気持ちに陥った私の戸惑いは、集まった各大学の「事例報告」を聴いて、いっそう深まりました。「龍谷の森」での私たちの活動に比較的近いのが天理大学の「建学の精神実践プログラム」でしたが、あとは非常にバラエティーに富んでいて、いささか焦点がはっきりしません。例えば、國學院大學の先生が、東京都内に点在する鎮守の森のCO_2吸収効果を学生たちと共に測定するという活動について報告されたり、法政大学の学生サークルであるキャンパス・エコロジー・フォーラムが、学園祭におけるゴミ処理活動について報告したり、と極めて雑多な印象を持ちました。

ただ、このキャンパス・エコロジー・フォーラムには、「学祭班」以外にも、茨城県土浦市での宍塚里山保全の市民団体と連携する「里山班」や、千葉県鴨川市で活躍する「棚田班」があり、その事例報告には大変興味深いものがありました。この「棚田班」は、NPO大山千枚田保存会から田を一枚借り、サークルの新入生歓迎会に田植え活動をしているのです。また、「緑化班」は、法政大学市ヶ谷キャンパスの屋上緑化の研究を実施し、全国大学生環境活動コンテストで受賞してもいるようです。法政大学のキャンパス・エコロジー・フォーラムの存在については、私も以前から知ってはいましたが、部員が100名を超える大きなサークルであるということも含めて、これほどまでに多様な活動をしているとは知らず、大変驚くとともに、羨ましくも思いました。キャンパス・エコロジーの活動そのものは、大学のキャンパスにおいてゴミ処理やエネルギー節約などを学生主体で実践していこうという全国規模の運動ですが、龍谷大学では、学生たちがこの運動に参加しているという話をいっこうに聞きませんし、「里山サークル　きのっ子」および「共存の森RU」といった小さなサークルが存在するものの、法政大学のキャンパス・エコロジー・フォーラムのような巨大な環境系のサークルはありません。キャンパス・エコロジーのサークルが、里山班や棚田班や緑化班にまで拡大しているということは、注目に値することだと思います。

また、広島経済大学の「武田山まちづくりプロジェクト」は、ごく一部の学生が地元のNPO活動に賛同し、大学がその中腹に位置する広島市安佐南区祇園の武田山で、竹林伐採などの里山保全活動を実施している、というものでした。この事例報告を行ったのは、広島経済大学の二人の学生でしたが、彼らの活動は、必ずしも大学そのものとは関わりがなく、大学生とはいえ、むしろあくまでも地元住民としての活動であるように理

解しました。

同じようなことは、秋田県のルーテル学院大学の藤井英一教授の事例報告にも見受けられました。藤井教授の報告は、白神山地の保全に関わったNPO活動と連携しながら、里地・里山の自然の保全と文化の継承を狙って、新たに「環境NPOマーブレス」を立ち上げた経緯を報告するものでした。ただ、このNPOは、ルーテル学院大学そのものと必ずしも直接関わっていないというように、私は理解しました。

大学そのものの活動として報告されたのは、天理大学の「建学の精神実践プログラム」でした。2004年度から開講された「森に生きる」は、天理大学の「建学の精神」実践プログラムの一環として、総合教育研究センターが担当する実習科目であるとのことです。奈良県の吉野郡川上村の水本家によって提供されている山林を、「天理大学　用木の森」と名づけて実習林としています。天理教の教えによれば、この世（＝地球）は「神のからだ」であり、神がみずからの「からだ」を傷つけてまで人々に教えようとしていることが何かを、この実習林で体験的に学習するのが目的である、ということです。下草刈りや枝打ち作業が中心のようですが、そうした作業を通して、人と木の間にある不思議な空間の生成を感じ取り、地球との命のつながりを体得することが可能なのだ、としています。

ちなみに、「用木」という言葉は、一部の地域では、200年、300年先を見越した大普請の用材になる木を意味するようで、ふつう80年前後で伐り出す際に、あえて伐り残しておくべき木の意味でも用いられたようです。「用木の森」という命名は、天理大学の人たちの志を最も適切に表現している、ということのようです。ただし、この「用木の森」は、地元の篤志家から借り受けているのであって、天理大学の所有地ではないそうです。スライド報告では、「用木の森」という大きな看板が登場したのですが、看板すら建てさせてくれる地元の方の志の大きさにも、私はいささか驚きました。早稲田大学自身は、東北地方にやはり借用地を得て、それを「思惟の森」と名づけてだいぶ以前から実習林としているようで、その事例が天理大学にとっても参考になったようです。

以上のように、少なくとも今回の第一回フォーラムで報告された事例を見る限り、龍谷大学のように大学自身が山林を所有しているケースは他にはなく、また、大学そのものが直接関与しているケースも極めて少数でした。それだけに、最初の事例報告者として登場した私の報告には、大きな関心と注目が集まりました。何せ文科省の助成を受け

て、「里山学・地域共生学」という名を冠した研究センターを運営しているのは、他には存在しないからです。それだけにまた、里山ORCには、全国の里山研究および里山保全活動に対して、大きな責任がある、と私は改めて思いました。

私の報告では、簡単な自己紹介のあと、まず、2005年12月に朝日・大学パートナーズシンポジウムとして金沢大学と共に開催した「人をつなぐ 未来を開く 大学の森－里山を『いま』に生かす－」に際して、江南和幸教授のプレゼンテーション用に作成した里山ORC紹介DVDを使いました。そのあと、龍谷大学および瀬田キャンパスの紹介、そして「龍谷の森」里山保全の会と里山ORC設立の経緯、さらに、金沢大学・九州大学・京都女子大学との四大学交流、中部大学の参加による五大学交流への発展、地元の市民や行政との連携・協働、高校生の「森の聞き書き甲子園」から「共存の森」への展開、といったことについて説明し、最後に、「里山」保全が持続可能社会および多様性の追求に有する意義について論じました。

(3)「一学一山運動」の可能性

早稲田大学側の説明では、今回、全国の約700大学に「一学一山運動」参加のアンケート調査を行ったところ、60余りの大学が回答を寄せ、その内の26大学が本運動への参加を申し出たようです。その中には、「角間の里山自然学校」の金沢大学、九州大学が含まれています。「『一学一山運動』に全国約700大学すべてが参加することは、すなわち700もの山や森林が護られることになります。大学が中心となって自然環境を守っていく。この日本初の試みに、貴大学も御賛同いただければ幸いです」、と「『一学一山運動』趣意書」は呼びかけています。趣旨は分かりますし、非常に有意義なものですから、里山ORCとしても、できるだけの協力はしたいと思いますし、積極的に参加していきたいと考えています。

ただ、私個人の意見ですが、大学が里山林的な土地を所有し、それを開発目的とするのではなく、里山保全活動や里山研究活動に活用しようとするケースが次第に増えてきていますので、まずは「里山」の研究と保全という目的を明確にしうる大学が連携することが必要だし、重要だし、現実的だと思います。その意味では、龍谷大学の事例はまさに先進的であり、私たち里山ORCの研究スタッフの連携こそが、大学「里山」交流としてよりいっそう具体化されるべきだと考えます。金沢大学、九州大学、京都女子大学

との連携を、さらに近畿大学、京都学園大学へとつなげるとともに、すでに連携を開始している中部大学、今後確実に連携することになる長野大学など、「里山」の研究・保全の実践を、学生交流を含めて、より豊かにしていく必要があると思います。

勿論、「一学一山運動」には、それとはまた別の可能性が多々あるようにも思われます。すべての大学が保全すべき自然地域を所有するということは、困難ですし、必ずしも必要ないでしょう。むしろ「里山」に限らず、各大学が、地元地域と密着する形で一定の保全活動地域を選定し、教育と研究を通じて、その地域と深く持続的に関わり、学生の社会活動の場として活用していく、という「一学一山運動」の発想には、素晴らしいものがあると思います。「環境の世紀」としての21世紀に、大学がよりいっそう社会と世界に開かれたものへと変貌する可能性を、「一学一山運動」がもたらすことを期待したいと思います。